

# フリースタイルな 僧侶たち



特集

らしさ

66

## 特集

# らしさ

今号のテーマは、「らしさ」です。「らしさ」はごくありふれた言葉ですが、「あなたらしくていいね」と肯定的に使われる場面もあれば、「〇〇らしくしなさい」と特定の役割に押し込める意味で使われることもある。実は多様な意味を持っていて、どこか捉えどころのない概念のようにも思えます。そんな「らしさ」にまつわる悩み・苦しみについて、今号と次号の2回にわたって考えていきます。

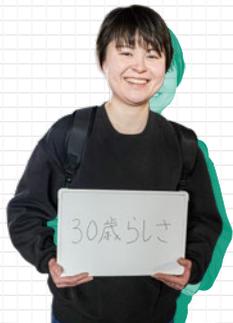
今号で焦点を当てるのは、「男らしさ」「女らしさ」「社会人らしさ」など、他者や社会によって規定される「らしさ」です。これらは他者との共通言語となって人間関係をなめらかにしてくれる一方で、ときに過剰な期待や抑圧となつてのしかかり、私たちが息苦しくさせることもあるように思います。

私たち僧侶にとっては、「僧侶らしさ」がその最たる例。はじめから良い印象を持って接してもらえることもあれば、過度な期待を持たれたり「お坊さんって〇〇なんでしょ」というイメージを一方的に向けられることもあり、僧侶としての在り方に悩むこともあります。

期待された「らしさ」を演じる自分。押し付けられた「らしさ」に抵抗する自分。「あなたらしい」と言われる自分。どこに本当の自分があって、どこに安心できる心の居場所があるのでしょうか。私たちが悩ませる「らしさ」の正体を探り、その向き合い方を考えます。

フリースタイルな僧侶たち編集長 秦正顕

このもやもやが  
30歳らしさ？



**30歳らしさ**：今年30歳です。会社では若手でもベテランでもないし、元気だけでは通用しなくなってきましたよね。節目の年齢なんだなって、今後のキャリアを意識しちゃいます(30代)。

「らしさ」って  
本当にあるの？



**私らしく生きています!**：考えてみただけ、ポジティブもネガティブも、あんまり「らしさ」を意識したことはないかもしれませぬ。あえて「らしさ」で言えば、私らしく自由に生きています(20代)。

笑顔でいるのも  
大変です



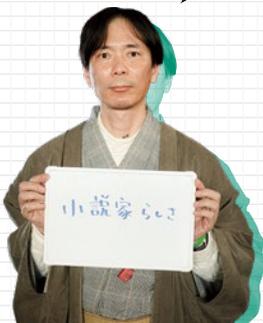
**接客業らしさ**：お客さんにはできるだけ良い印象をもって欲しいって思います。だけど正直、いつも笑顔で愛想よくしなくちゃいけないのは、ちょっと窮屈です(20代)。

突撃! 街角インタビュー!

# あなたの〇〇らしさを 教えてください!

普段みんなが感じている「〇〇らしさ」ってどんなもの?  
街角で出会った人たちに、「〇〇らしさ」について聞いてみました。

ネタになるかも?



**小説家らしさ**：家族と出かけていて「これってネタになりそう…」って感じるとき、自分って小説家っぽいなど。人から「それっぽい」と言われることも多く、「どこが?」と感じながらも、なんだか怖くて聞けません(50代)。

見た目と内面は  
違うのに…



**ゆるふわらしさ**：外見から、ふんわりしたイメージを押しつけられます。鋭い発言をすると、相手の印象とのギャップにびっくりされてるかも?と感ずることも。でも、見た目で判断されるのは、こっちも願ひ下げです(20代)。

人として見てほしい



**ミュージシャンらしさ**：「ミュージシャンです」と言うと、相手のミュージシャン像を重ねられて会話がはじまって、なんか違うってうか。「人」として見ればよくない?って思ひます。人と人として話したいですよね(30代)。

日本人らしく  
しなきゃ…



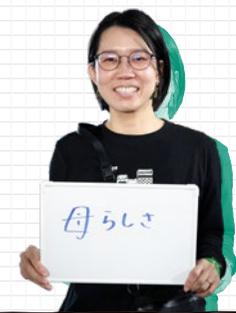
**日本人らしさ**：海外に行くと、自分が日本人だということ意識します。マナーのよい日本人の印象を壊さないように、日本人らしくふるまわなくちゃと、そのイメージにはまっっている自分がありますね(20代)。

理系っぽいと  
言われるけど…



**理系らしさ**：理系の大学院生です。「理系っぽい」と言われますが、自分ではあんまりピンときてなくて。でも、適当なことを言っても「さすが理系!」と感心されることもあって、案外イメージに助けられているのかも(20代)。

自分って何だろう?



**母らしさ**：0歳児の集まりに参加したとき、初めて母という属性を意識しました。今まで自分が積み上げてきたものが全部なくなって、ぶつ切りになった感じ。母としか見られない中で、「自分って何?」と戸惑ひました(30代)。

# 「らしさ」の苦しみの、その先に

雪山 俊隆

浄土真宗本願寺派 白雪山善巧寺 住職



「自分らしく生きる」という言葉が溢れる現代。その一方で、私たちは「女らしさ」「男らしさ」「親らしさ」「社会人らしさ」といった、他者や社会が規定する「らしさ」に押しつぶされそうになることがあります。今回お話を伺ったのは、僧侶の雪山さん。かつて「僧侶らしさ」という期待に応えようとして、心身ともに限界を迎え、一度はお寺を離れた経験を持っています。雪山さんの半生と、仏教の智慧から、私たちが「〇〇らしさ」とどう向き合い、生きていけばよいのか、そのヒントを探ります。

取材・文—秦 正顕、藏田史哉、村田保子

写真—秦 正顕

## 仏教では「らしさ」をどう考える？

——本日はよろしくお願ひします。今回のテーマは「らしさ」です。まずは仏教の視点から、「らしさ」というものをどう捉えるべきか、教えていただけますか。

雪山 色々な「らしさ」がありますよね。息苦しくなることもあると思います。これに対してまず仏教の基本スタンスとして言えることは、そもそも「自分なっていないよ」ということだと思います。

——「自分がない」ですか。少しイメージが難しいですが……。

雪山 皆さんが「自分」と思っているものは、実は環境や条件など、色々な要素によって規定されています。仕事場に行けば「部下」や「上司」になるし、家に帰れば「親」や「子」になる。人が集まれば、その場に求められる役割が自然と生まれます。ある場所ではムードメーカーだけど、周りに盛り上げ上手

な人がいたら自分は一步引いて聞き役に回るとか、自然にやっていますよね。

——そうですね。場面に応じて、無意識にモードを切り替えていますね。

雪山 そうそう。このように、全ての物事は関係性によって成立していて、それによって自分のポジションや振る舞いが決まっていく。これを仏教では「縁」と言います。「これが自分！」と思っているものも、環境が変わればガラリと変化する。「自分」というのは、実はそんなレベルのものなのではないでしょうか。この考えを突き詰めていくと、確固たる「自分」とか「心のありよう」と言うものは常に移り変わるもので、固定的なものはないということになります。このように自分を見ていくのが、仏教の考え方です。

## 悟りの視点と、現実のわたし

——なるほど。「らしさ」には実体がな

雪山 そうですね。「らしさ」を演じる自分というの、関係性によって生じる一側面にすぎないというふうな捉えられるかと思えます。……でも、なんというかな。今お話ししたことは、非常に悟りの領域の言葉だなと思っていて。実感としては「いや、あるやん。」という（笑）。「自分なんてない」という悟りの視点は理解できても、現実には「これが私だ」という感覚や、周りから押し付けられる「らしさ」に苦しむ感覚は、そう消えるものではないと思うんですね。

——確かに、それで解決すれば苦労しないですよ。では、雪山さんは「らしさ」とどのように向き合われてきたのでしょうか。

雪山 僕は「本当の自分」と「そうじゃない嘘の自分」とを、二分して考えて苦しんでいたように思います。「本当の自分」と「嘘の自分」を切り分けて考えていると、日常の大半が「だめな自分」に見えてしまいます。けれど、うまく立ち回る自分も、取り繕う自分も、失



敗する自分も、どれも切り離せない自分です。そうした多面性を含めて自分だと思えたとき、心がとても軽くなった気がします。

### 20代の挫折。「僧侶らしさ」の期待に押しつぶされて

——それは大きな転換ですね。どのようにその境地に辿りつかれたのでしょうか。

雪山 私は学生時代を京都で過ごし、20代前半で実家のお寺に戻りました。当時の僕はというと、やる気満々、意気揚々。色々やってみたくもあって、エネルギーに満ち溢れていました。でも、すぐに気づかされたんです。「門徒(檀家)さんたちが求めているのは、「私自身」ではなくて「僧侶」という役割なのだ。僕の意見なんて求められていない場面にたくさん遭遇して、「あ、俺、必要ねえんだ」と思ってしまったんです。それでもどうにか皆さんに認めてもらいたい。期待に応えたい。その思いで皆さんと話していくと、それ

求めるわけです。僕も、期待に添えるようにやってみるんだけど、向こうも「なんか違うな」という顔をするわけですよ(笑)。「お父さんはこうやったぞ。ああやったぞ」というのがどんどん提示されるので、一年も経たずに「あ、これ無理だわ」と、打ちのめされてしまいました。その頃は本当にしんどくて、正直、仏教的な救いには全然出会えませんでしたね。毎日、自分の中で戦って、追い詰められていきました。

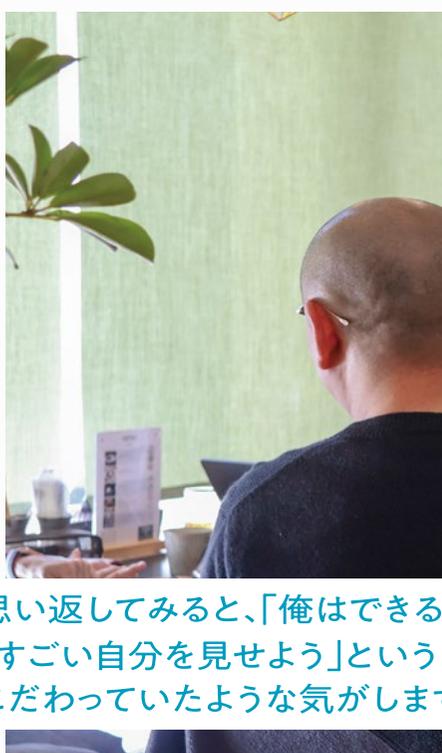
### 「その場を離れる」という救いと、再スタート

——それから、どうされたのでしょうか。

雪山 限界が来たので、一旦、その環境から離れたんです。ダライ・ラマが「危険な場所からは、離れましょう」と仰っているのですが、結局それが一番の解決策なんですよね。もちろん人によっては離れること自体が難しい状況もありますが、その場にながら解決するのは僕には無理でした。自分でも記憶がないのですが、気づいたら富山



それぞれが僧侶(僕)に求める「らしさ」がね、もうバラバラなんですよ。



思い返してみると、「俺はできる人間だ」「すごい自分を見せよう」ということにこだわっていたような気がします



それが僧侶(僕)に求める「らしさ」がね、もうバラバラなんですよ。

——人によって「理想の僧侶像」が違ったのですね。

雪山 そうなんです。ある人は「住職ならドンと威厳を持って、上座に座っている」と指導してくる。でも別の人は「今の時代のお坊さんは、誰とでも気さくに悩みを聞けなきゃダメよ」と言う。この時点で、期待されていることが真逆ですよ。最初はなんとか期待に応えたいと思って頑張っていました。が、どうしてもできない部分も出てきます。色々な人の声を聴きすぎて、いっぱいいっぱいになってしまっ、そもそも自分はもうなりましたか。のかさえ分らなくなっていました。

——そこには、先代であるお父様の存在も大きかったのでしょうか。

雪山 ありましたね。「先代住職(父親)らしさ」。うちは父親が早くに亡くなったので、皆さん「父親の代わりが来た」という喜びで迎えてくれて、父親像を

を出て、大阪にある学生時代の恩師の家の前に立つてました。その恩師は、突然の訪問にもかかわらず、「雪山くんか、どうしたんや。」って話を聞いてくれました。僕はボロボロと泣いていたと思います。全部を受け止めてくれて、「じゃあ飯食うか」ってカレーを食わせてくれてね。それから結局、一年ほど京都でフリーターをしていました。

——お坊さんを辞めて、フリーターに。それで心持ちは変わりましたか？

雪山 ええ、もう、嘘のように楽でした。「背負わなきゃいけない」と思っていたものが全て無くなったのでね。方々からの期待にがんじがらめになっていたのが解放されて、誰からも必要とされない自分になるわけですが、それがめちゃくちゃ心地よかったです(笑)。それからしばらくは気ままに過ごしていました。しかし、時間が経つとやっぱり当時のことが自然に頭に浮かんでくるんです。少し距離をとって考えてみると、もうちょっとこうできたなという考えも出てきます。それで、だんだんと、

またお寺に帰りたいなどという思いが湧いてきて。

——客観的に自分を見られるようになって、改善点も見えてきたんですね。

雪山 そうそう。思い返してみると、「俺はできる人間だ」「すごい自分を見せよう」ということにこだわっていたような気がします。でもダメだった。だから、またお寺に戻れるなら、もう張り切るのはやめようと思いました。身の丈に合ったやり方にしよう。自分の限界を一度見たからこそ、無理をしない。そのようなスタンスでいると、少し楽な気持ちになりました。

### 諦めて気づいた「苦しみ」の正体

——再スタートですね。でも、そうは言ってもご門徒さんからの期待は強くあったのではないのでしょうか。

雪山 ええ。でももう「できない」ということを自分の中の深いところまで落とし込んだので、「皆さんの期待には

応えられません」というスタンスで向き合うようにしたんです。良い意味での諦めですよ。そしたら、面白いことに気づきました。こっちが思い詰めていたほど、実はそんなに期待もされていなかったんです。

——えっ、そうなのですか？

雪山 そうなんです。まあ、大きくしすぎていたんですね。自分で勝手に相手の期待をイメージして、大きく膨らませていただけだった。お寺に戻るとき、僕は「みんなを裏切って逃げた大罪人だ」と思っていて、一人一人に土下座して回る覚悟でした。でも、最初の一人に会いに行ったら、めちゃくちゃ軽い感じだったんですね。「あ、そうなの？」って。僕からすると大きな期待をかけてくださったって方だったのですが、拍子抜けするほどあっさりとして受け入れてくれたんです。

——自分で、重く捉えすぎていたと。

雪山 そうだったようです。相手のちょっとした言葉や、軽い気持ちでか

けてくれた期待を、自分で勝手に大きくして、気づいたら大きなプレッシャーになっていたのです。でもこれって、どんな人でもあることではないでしょうか。仕事でも、家庭でも。

——確かに、何気なくかけられる「頑張ってるよ、期待してるよ」という言葉を、自分で大きくしてしまうことはよくあることかもしれませんね。

雪山 それはどうして大きくなってしまったかというと、実は「自分がすごいと思われたい」という自我なんじゃないかと思っています。人間は、誰かの期待に応えたいという気持ちと、期待に届いてほしいと思われたいという気持ちを持っているように思います。「すごいと思われたい」という自我が強いと、小さな期待を自分で肥大化させてしまう。そうしていつの間にか、それに追い詰められてしまう。

——とてもわかる気がします。

雪山 苦しみの正体、覗いてみたら実は自分が作っていた、ということなんです。

誰かに苦しめられていると思っていたけど、実は自分に苦しめられているだけだった。それが分かったと、楽になりますよ。まあ、僕の場合は、限界まで行って「もう期待には応えられません」というスタンスでやってみて初めて気づけたわけなので、そう簡単にはいきませんが。だけど、辛い経験を積み重ねることで、良い意味での諦めがついて、気楽な境地がやってくるということはあるような気がします。

### 「らしさ」を手放した先に、集まってきたもの

——今、雪山さんは「僧侶らしさ」に苦しめられることはありませんか？

雪山 今はもう、あんまりないですね。むしろ、若い頃に求めていた「らしさ」が解体されて、無くなったことで、逆に周りから見ただ「雪山さんらしさ」みたいなものが自然と生まれてきているような気がします。「らしさ」って結局、外側が決めることですから。自分でコントロールするものでもないかな。

——目指すものではなく、にじみ出てくるものに変ったんですね。では、逆に「らしさ」に乗っかったり、助けられたりということはありますか？

雪山 ありますね。「らしさ」は心地よい距離を保てれば、コミュニケーションツールになりますよね。僕の場合「僧侶」という肩書きは、一つの大きな手札なんです。どの場に行っても、誰かが興味を持ってくれる。そういう意味で活用しますね。「らしさ」に縛られるのではなく、授かりものとして、使えるときは使うのがいいんじゃないですかね。今の私と「僧侶らしさ」はそんな距離感です。

——最後に、当時の「やる気に満ち溢れ、そして追い詰められていた20代の自分」に声をかけるとしたら、何と言いますか？

雪山 うーん、かける言葉はないかな……。(笑) 当時の彼には、聞く耳がないと思うんですよ。それくらい追い詰められていたし、孤独だった。周りが全員、敵に見えていたから。でも、もし

目の前にそんな若者がいたら、僕は「応援する」と思います。苦しくなるのが分かっている、頑張れ、頑張れって。その道を歩んでいくしかないから。ただ、「僕はあなたの味方ですよ」ということだけは、伝え続けたいですね。たとえ当時の僕が「この人怪しいな」と信じなかったとしても。

ゆきやま・としかか | 1973年生まれ。富山県黒部市、浄土真宗本願寺派善巧寺第22代住職。音楽イベント「お寺座LIVE」やアート企画「オテラ・ザ・エキシビジョン」を主催するなど文化的な活動を行い、また定例法座「ほっこり法座」など、伝統的な行事の復興にも力を注ぐ。2025年より敷地内の会館で「cafe 愚禿」を運営。  
<https://www.zengyou.net>

1 善巧寺境内にある「カフェ愚禿(ぐとく)」。看板メニューは「無常のホットケーキ」。2 「カフェ愚禿」オリジナルブレンドティー&ハーブティー。3 親鸞聖人750回大遠忌記念事業として新調された内陣天井画。日本画家・清河恵美さん制作。中央の深いブルーを基調に立山連峰が360度連なっている。4 親鸞聖人像。新潟時代、農作業を終えて夕日に向かって合掌している姿。山口県莊厳寺白鳥文明さん制作。



誇るよ全部  
僕が僕であるための要素を  
好きだよ全部  
君という僕の黒い部分も



「誇るよ全部 僕が僕であるための要素を好きだよ全部 君という僕の黒い部分も」という歌詞に注目した。少年ジャンプを教科書に育った私には、『NARUTO』の内なる自分を抱きしめる名シーンが重なって見える。そこに黒を排除する勸善懲悪の世界観はない。「知ってる？白って200色あんなねん」と逃げ場のない黒を追い詰め排除しようとする世界線のアンミカさんの姿もない。黒さえも「誇る」と肯定する。てかアンミカさんはきっと何色も肯定する。また、これは仏教における煩惱観のシフトのようにも感じた。かつては滅すべき煩惱が、長い歴史を経て「煩惱即菩提(煩惱があるからこそ悟れる)」へと至った。煩惱を抱えたまま悟るという展開には、むしろ煩惱自身も

めちゃくちゃ驚いたことだろう。「君という僕の黒い部分」は「弱さ」と解釈できる。進もうとする僕と傷つきたくないと引き留める君。しかしそれは自己の防衛反応として役割を全うしているにすぎないのではないか。それに、きっとその防衛反応に救われた日もあるはずだ。そうならば僕も君も生命の叡智そのものだ。その叡智に感嘆をもって、全身全霊を誇って生ききっていい。私たちは自分を決して切り捨てることはできないのだから。

蘆月真成 (あしづき・しんじょう) | 曹洞宗 僧侶 (静岡県/大雄山宝鏡寺)・カメラマン。坐禅会を東京・静岡を中心に定期開催。『ひゃくえむ。』の推しは海菜。

# (((MUSIC 僧 ON)))

現代を生きる僧侶や仏教好きが音楽について語るコーナー

今号の楽曲

Official 髭男dism  
『らしさ』



Illustration by ツチダマホ

今号のテーマにぴったりなこの曲。100m走をテーマにした映画「ひゃくえむ」の主題歌で、主人公の「らしさ」にまつわる葛藤が描かれています。この楽曲を通して、「らしさ」とは何か、そこに生まれる苦しみとはいかなるものかを、僧侶・ファンの立場から熱く語ってもらいました。言葉では簡単ですが、考え始めると一筋縄にはいかない、そんな「らしさ」を再考します。

らしさ  
そんなものを  
抱えては

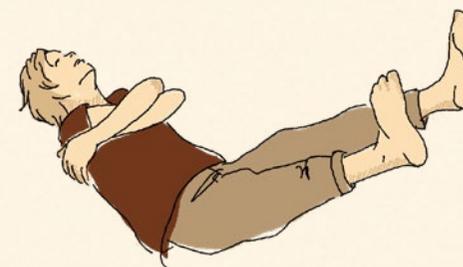


僕らは泣いてた  
笑ってた  
競い合ったまま

Official 髭男dism 『らしさ』

これしかないから  
しがみついていたかったんだ  
居場所が欲しかったんだ

Official 髭男dism 「らしさ」



「自分らしさ」とは何だろう。もし自分に迷いがあるなら、Official 髭男dismの『らしさ』を聴いて欲しい。この楽曲は「自分らしさとは、自分に関する酸いも甘いも噛み分けて包容することだ」と教えてくれる。歌詞では自分を奮い立たせる“らしさ”を「僕」、自分の足枷となる“らしさ”を「君」として表現している。その僕と君が葛藤した末に、最後には「ああ生きてて良かったな」と両方の“らしさ”を肯定できる人生讃歌である。またこの楽曲は、『ひゃくえむ。』という漫画原作の映画主題歌で、100m走に打ち込む選手の心境や作者独自の哲学性を落とし込んだ歌詞となっている。Official 髭男dismの音楽は、タイアツ

ブ作品への敬意を込めた要素だけでなく、単体で楽曲を聴くリスナーの人生にも寄り添うことを大切にしている。私は、ライブの定番曲である『Stand By You』にある、「どんなに凄い 賞や順位より 君の側に居られることが一番誇らしい」という歌詞が好きだ。そしてこの歌詞のように、作品の主人公や聴く人の人生に寄り添う楽曲を作り続けるヒゲダン「らしさ」にも惹かれ続けている。

ひげだんlover | note “ひげだんlover”にて記事投稿をしているOfficial 髭男dismファンのライターです。

人はみな、「自分こそ最も自分を知っている」と素直に勘違いしながら生きていくように思う。私もそうだ。他人よりは確実に、自分について詳しいと思っ  
ている。誰よりも長く、私はこの心と  
身体と一緒に生きてきたのだ。しかし  
この目は、直接自分を見たことがない。  
他人を介してしか、キャラすらも定ま  
らない。自分とは、他人を介してしか  
成立しない存在であった。だからこそ  
時に、自分らしさに戸惑う。「これを言  
うべきか」「どう思われるか」「後悔し  
ないか」その葛藤を、歌詞には「僕」と「君」  
の対比で表される。前に進もうとする  
私に、ときおり君が語りかけてくるの  
だ。他人を介して作られる、比較・評  
価の中での自分像と、今の自分との乖  
離を言語化していく君に、僕は苦しむ。

しかしその自分像を作るのも自分であった。「君」という黒い部分は決して消えない。過去の僕と共に、時に襲ってくる。しかしそれは、排除していく対象ではなかった。「君」こそ僕だったのが、僕こそ「君」だったのかと、出会いなおすからこそ「僕ら」が泣き笑っているのだ。親鸞聖人は「かげとかたちとのごとくにて、ヨルヒルツネニマモルナリ(夜昼常に護るなり)」と、阿弥陀如来という仏様の救いを、自分と影に喩えた。影は、私とは離れない。

藏田史哉(くらた・ふみや) | 浄土真宗 本願寺派僧侶(東京都/上宮寺)。常例法座(お経と法話の会)を毎月2回、宗教に触れる会(様々な宗教や人生を考え対話する会)を毎月開催。詳細は頑張った作ったH.Pへ。 <https://yogung.jp>



丹羽宣子  
宗教社会学者

水野綾巴  
日蓮宗 僧侶／編集者

## 「らしさ」とは何か。

### 女性僧侶たちと考える 生き方のかたち

みなさんは、「お坊さん」と聞いてどんな姿を思い浮かべるでしょうか。坊主頭で、心穏やかで、高齢の男性——そんなイメージを抱く人が多いかもしれません。しかし実際には、最も女性僧侶の割合の多い浄土真宗本願寺派では、全体の約26.6%を占めています（宗教年鑑 令和7年度）。

一方、こうした事実と世間のイメージは必ずしも追いついていません。固定化された“お坊さんらしさ”に、実は当の僧侶たち自身が戸惑いや葛藤を抱えていることも少なくないのです。

そこで今回は『〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学』の著者であり、立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科助教の丹羽宣子さんをゲストに迎え、日蓮宗僧侶であり編集者の水野綾巴が聞き手となり、「お坊さんらしさ」や「女性らしさ」を入り口に、私たちの生き方と“らしさ”の関係を見つめ直します。

後半は、女性僧侶2名を交え、現場からのリアルな声を聞いていきます。僧侶という立場を手がかりに、見えてくる「らしさ」の正体とは——。

取材・文—水野綾巴、秦正顕  
写真—蘆月真成

### 他者へ寄り添う力は、 女性らしさなのか？

**水野** 今日はよろしくお願います。丹羽さんは、著書で数名の女性僧侶へのインタビューを通して「僧侶らしさ」と「女性らしさ」のあり方や関係性を掘り下げており、とても興味深く拝読しました。私自身、女性僧侶として共感する部分も多くありました。

**丹羽** ありがとうございます。

**水野** まず印象的だったのは、「僧侶らしさ」と「女性らしさ」は対立概念なのだろうか。それとも両立可能なのだろうか。「両立可能な場合、〈女性らしさ〉は〈僧侶らしさ〉の下位に位置してしまうのだろうか（本書7頁）」という問いです。

女性僧侶に限らず、人は多様な「らしさ」が同居している生き物だと思います。だからこそ、その折り合いに悩み、苦しむ人もいます。そもそも、丹羽さんの中でこの問いが出てきた背景には何があったのでしょうか。

**丹羽** 2002年に、当時の日蓮宗女性教師の有志が実施した「日蓮宗全女性教師アンケート報告書」の記述が出发点になっています。

報告書には、「女性教師は、尼僧なら

ではのやり方で男性僧侶ができないことをやりましょう」とあり、その具体例として「経済的に困窮している世帯や子ども、障害のある方など社会的弱者に手を差し伸べましょう」というようなことが書かれていました。でも、それを読んだ時に少し違和感を覚えたんです。

**水野** それは、「女性僧侶ができること」社会的に苦しんでいる人に手を差し伸べる行為」とされている点でしょうか。

**丹羽** はい。本来それは性差の話ではなく、僧侶として「できること」であり、むしろ担うべきことですよ。にも関わらず、なぜそれを「女性らしさ」という枠で囲って、自分たちの役割としてエンパワーメントしようとしているのだろうか。そこに疑問を抱いたのが、この問いの始まりです。

**水野** アンケートが実施された2002年は、今から約25年前です。現在と比べて女性僧侶の認知は低く、より男性中心の社会だったのではないかと思います。

**丹羽** お寺の社会には、儀礼の執行能力や読経の声のトーンなど、確固とした「僧侶らしさ」の基準がありますよね。ただでさえ女性が参入しにくい環境の中で、母や妻として家事や育児も担い、思うように存在価値を示せない状況があった。

だからこそ「女性である自分たちがそこ（弱者救済やケアの役割）を担うんだ」という提示は、当時取り得た数少ない戦略だったのかもしれない。

**水野** なるほど。

**丹羽** ただ近年、僧侶らしさというものを問い直すと、かつて「女性らしさ」として提示されていた要素こそ、むしろ社会から求められる僧侶の役割になってきているという逆転現象が起きています。

**水野** お寺という枠を超えて、僧侶とし

て社会の役に立てることや役割が広がってきたように思います。

**丹羽** 高齢化や無縁社会の進行、孤独死できる場が増えてきています。だからこそ、社会的に苦しんでいる人に手を差し伸べる行為——社会とのコミュニケーションやケアの実践を「女性らしさ」という枠で閉じてしまうと、結果として男性僧侶の宗教的実践の可能性まで狭めてしまいかねません。





### ジェンダーは女性だけの問題ではない

**水野** 「女性らしさ」は、ともすれば女性だけの問題として語られがちです。ですが、本来ジェンダーとは、社会が作り出した性別に対する期待や役割であって、女性が「女性らしさ」に苦しんでいるとしたら、男性も「男性らしさ」に苦しんでいます。先ほど丹羽さんがおっしゃったように、誰にでも関わることですよね。

**丹羽** そうですね。ジェンダーを学ぶ一番の意義って、「自分の苦しみはどこから来ているのか」を知ることにあると思います。

り、子どもがいます。職業は大学教員で、あまり怖そうに見られないという外見的特性もあります。コミュニケーションの相手や置かれている環境に応じて、こうした自分の持つ資源をどう使うかを日々調整しています。らしさをそのまま活かすこともあれば、あえてギャップを演出することもできるし、場合によっては抑えることもできる。らしさを操作すると、伝えられるメッセージの範囲が広がるわけです。らしさって実はとても恣意的で、本質的ではない。だからこそ着脱ができるんです。

**水野** なるほど、よく分かります。私は「らしさ」に助けられてきた部分もあって。時には、「らしくない」ことが好意的に受け取られることもありますよね。一般社会で働いていて「実はお坊さんなんです」と言うと、いい意味で驚かれて、会話の入り口になることもあります。なので、「らしさ」の恩恵を受けてきたという感覚があります。

**丹羽** 一方で、人が社会的存在である限り、「何々らしさ」といった枠組みから評価されることからは逃れられませんか。お医者さんにはお医者さんらしさを、先生には先生らしさを求めてしまう。人間は社会的存在なので、周囲から「こ



**水野** どういうことでしょうか。

**丹羽** 例えば、私が高校生の頃、「女性だから」という理由で大学進学を諦めざるを得なかった同級生がいました。一方「男性だから」浪人してでも高い偏差値の大学に進学しないとイケない、というプレッシャーに苦しんでいる人もいました。また、別の男子学生が「女子も最難関大学を目指さないとジェンダーギャップは埋まらない」と言っていたのを聞いた時に、不可視化された条件やハードルがあることへの憤りと、同時に彼自身もまた競争に勝ち続けることを強いられるのだらうと感じたことがあります。

私は大学院まで進学できましたが、それは自分一人だけの努力ではなく、た

であってほしい」という期待が生まれまし、私たち自身もそれに応えたいと思ってしまうものです。

**水野** その一連が、苦しさを生んでしまう要因でもあります。

**丹羽** はい。ただ、実は「らしさ」をある程度操作することができると、社会生活の中では周囲との対立が起きにくくなるのかな、と。

**水野** らしさの使い方によっては平和に生きられる、と。とはいえ、演じる先にはどこか無理が生じてしまうようにも感じます。

**丹羽** そうですね。だからこそ、「らしさ」を自分の中にある資源の動員だと捉えられるようになる、過度に縛られずに済みます。「らしさ」のしがらみから完全に逃れることはできなくても、その作用や背景を理解することで、適切な距離を取ることができます。「らしさ」がコントロール可能なものになります。

そうした理解を踏まえて、自分をどう位置づけるのか、相手や環境とどう関わるのかを考えられるようになると、「らしさ」は生きづらさを生むものではなく、むしろ自分を活かし、生きやすさを支えるものにもなり得るのではないだろうか。



また進学を選択できる環境が整っていたという側面が大きいです。

**水野** 仏教界においても、世襲が一般的になってからは「男子が継ぐ」という考え方によって、職業選択の自由がない現実に葛藤する男性僧侶も多いですよね。実際、私は僧侶のキャリアについて研究していますが、そうした葛藤を抱える声は少なくありません。

**丹羽** はい。ジェンダー研究は、個人の生きづらさが、実は「男だから」「女だから」という社会的規範の中で形づくられていることを可視化してくれます。同時に、その規範は固定されたものではなく、変えていくことができるという可能性まで示してくれる。私たちを取り巻

く社会の解像度を上げる視点なんです。  
**水野** 自身や社会の見方を更新するきっかけになる。さらに言うと、ジェンダーに向き合うことで、社会の硬直した部分が少し緩み、女性だけではなく男性も楽になる可能性があるということですね。  
**丹羽** 昨今、社会全体で男性の育児参加が当たり前になりつつあるように、仏教界にもその変化の波が届き始めています。若手の僧侶を中心に、家庭や家族のケアに積極的に関わろうとする動きが、この2、3年で増えてきました。「女性らしさIIケア」と結びつけられていた時代とは異なり、今は男性僧侶の側からも新しい「語り」が生まれてくるのではないかと感じています。

### 「らしさ」とは、戦略的選択

**水野** 丹羽さんが冒頭に「らしさ」を「戦略」とお話していたのがとても面白いなと思いました。

**丹羽** 「らしさ」って、自分の持っているさまざまな資源を総動員する、一種の「戦略的選択」だと思っんです。

**水野** もう少し詳しく教えてください。  
**丹羽** 例えば、私は女性であり、母であ

水野綾巴 (写真左)、丹羽宣子 (写真右)



## お坊さんらしくない! ことの高藤

**水野** ここからは、女性僧侶の伊藤さん、石上桜子さんのお二人が加わり、お話をしていきます。お二人は実際にお坊さんとして法務に関わる中で、「らしさ」による葛藤を感じることはありますか？

**伊藤** お勤めをした後に「本当にお坊さんなんですか？」と聞かれることがあります。お坊さんは髪の毛を剃った高齢の男性で威厳があつて……というイメージがあるからこそ、私が出ていくと「コスプレ？」くらいに思われてしまう。

お経をたくさん読んで、お坊さんの格好をしていても、どこか本物になれてない感じがあつて。将来、住職になった時に信用してもらえらるのだろうか、という不安はありました。でも、最近は考えすぎてもしょうがないとも思っています。

**丹羽** 以前、ある女性僧侶の方が子育てママに向けた本を刊行しました。彼女は「いわゆる従来のイメージのお坊さんの著書だと、書店では仏教書の棚に置か

れてしまつて本当に届けたい人に届かない」と話していました。

**水野** 女性僧侶だからこそ、届けられる相手がいたということですね。

**丹羽** はい。あくまで一例ですが、自分の立場や経験だからこそ生まれる「接点」は必ずある。それを自覚するのは、とても大切なことだと思います。

**石上** 私は逆に女性だから良かったと思うことも多くて。自坊の住職である父は、これまで子育てや家事にあまり関わらず、僧侶の職務に専念してきました。もちろん尊敬していますが、私の場合は結婚して苗字が変わったり、母になつて育児を経験したことで、これまで見えていなかった世界に気づけるようになりました。新しい視点が自分の中に加わつた感覚があつて、例えば「門徒さんをお迎える際にも、「この奥さんはどんな思いで法事に来られているのだろう」などと想像しながら接することが増えたように思います。

**水野** 丹羽さんとの話にもありましたが、「らしさ」を戦略的に使つたり、着脱

可能にするためには、ひとつの場所だけに留まらずに多様な体験やコミュニティとつながることで、俯瞰して自身や周囲を見られることが重要ではないかと思うんです。

**丹羽** そうですね。

**水野** 「らしさ」を一旦置いておける場つまり枠から離れられる場や時間があることが健全なものではないかと。時には演じたり戦略的に使うために、僧侶らしさや母らしさ、妻らしさといった役割を休ませる。そのためにも、いろんな属性やコミュニティを行き来しながら生きていくことが必要なのかもしれない。

**丹羽** 先ほどお話しした通り、私も「らしさ」による理不尽さを感じたことはあります。でも、それは本質ではなく社会的につくられたものだと思つた時、見え方が変わりました。現実から完全に逃れることはできなくても、どう向き合うかは選べる。それはジェンダー論や社会学の知見に出会えたからです。

属性やコミュニティの行き来もそうですし、著書でまとめたように他者の事例

を知ること、一歩引いて俯瞰した視点を身につけることが可能だと思います。

## 役割や「らしさ」をはがす

**丹羽** 先ほどの石上さんの話ともつながりますが、仏教界を見ると、明治以降「法務を担う男性の住職」と「それを支える奥さん」という体制がとてもうまく機能してきました。だからこそ、例えば女性が住職になった途端、本来奥さんが担っていた役割まで一人で背負わなければならぬといった問題が生まれてしまう。

**伊藤** 分かります。なので、将来は父の役割（法務）と母の役割（門徒さんとの付き合いなど）を一人で担うことになるのかと思うと、正直大変だなと感じます。

**石上** 私も、夫は会社勤めですがお寺に関わつてほしいとは思っていないですし、もし思つていたとしても言えないですね……。

**丹羽** 冗談のように聞こえるかもしれ



(写真右から)  
いわがみ・さくら(一)浄土真宗本願寺派僧侶。金融機関と人材紹介会社で営業職として勤務後、家族の転勤に伴い中国に拠点を移す。現在は帰国し、業務委託で採用事務の仕事に携わりながら実家のお寺の法務を手伝う。第2子を妊娠中。  
みずの・りょうは一日蓮宗僧侶、編集者。出版社で雑誌編集を経てベンチャー企業の立ち上げに参画。独立後も編集者として幅広く活動する。僧侶のキャリアを考える「僧侶の働き方研究所」の代表を務め、「僧侶のキャリア白書 <02>」を上梓した。2025年に自坊の副住職に就任。3児の母。

にわのぶ(一)2017年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了、博士(社会学)。立教大学コミュニケーション福祉学部コミュニケーション政策学科助教。國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所客員研究員、(公財)国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター研究員等を経て現職。著書に「僧侶らしさ」と「女性らしさ」の宗教社会学(見洋書房)がある。

いとう(一)浄土真宗本願寺派僧侶。富山県出身、25歳。現在は都内のベンチャー企業で勤務しながら、お盆や年末年始に自坊の法務を手伝っている。「フリースタイルな僧侶たち」の編集メンバー。

ませんが、女性僧侶の方で「奥さんが欲しい」って言う方が多いんですよ。

そもそもこの家族経営という形態は、異性愛を前提に作られています。社会ではDE&Iの推進などによって家族やセクシャリティのあり方が変わっている中で、やはり仏教界も向き合うべきテーマだと思います。

**水野** 「家族経営」でいうと、石上さんは「家族だけを経営をやめる」というテーマで話し合いの場をつくっていると聞きました。

**石上** はい。家族とお寺のことについて話し合つと、どうしても感情的になっ

てしまつていました。そこで、寺族ではありませんが、お寺の運営に関わつてくださっている方にも参加していただき、月に一度、話し合いの場を設けるようにしたんです。すると、想像以上に冷静に話せるようになりました。

**水野** 先ほど役割を休ませるとい話をしましたが、今度は内側に家族以外の第三者を迎え入れることで、自分たちが背負ってきた役割そのものを、少しずつはがしていく方法もありそうですね。そもそもお寺は「半公共」的な存在です。

**丹羽** すごく興味深いです。先ほどもお話ししましたが、宗教もまた世俗社会

の中にあるものですから、社会と地続きであることは常に意識していかなければならないと思います。もしお寺に関わる人たちが幸せでなければ、誰もお寺に足を運びたいとは思わなくなつてしまいますよね。

自分たちだけで閉じるのではなく、さまざまな意味で開いていく——それが、これからのお寺やお坊さんに求められていることなのだと思います。

**水野** この記事が、一人ひとりがある「らしさ」を選び、どんな「らしさ」を手放していくのかを考える、ひとつのきっかけになれば嬉しいですね。

# フリー スタイルな 僧侶図鑑

Vol.03  
霍野廣由

浄土真宗本願寺派  
覚円寺 副住職

FREEMONKS DIRECTORY



KOYU TSURUNO

「フリースタイルな僧侶図鑑」は、枠にとらわれないフリースタイルな活動を通して仏教の未来をひらく僧侶たちの姿を紹介する企画です。第三回は、お寺での活動だけでなく、社会で様々な取り組みをされている、霍野廣由さんにお話を伺いました。

取材・文—菊川尚悟、鈴木一世  
写真—鈴木一世

つるの・こうゆう | 浄土真宗本願寺派覚円寺副住職。認定NPO法人京都自死・自殺相談センター(Sotto) 理事。TERA Energy 株式会社取締役。万博寺発起人。  
Instagram @koyu.tsuruno  
https://kakuenji-temple.studio.site

## Q1 お寺について教えてください！

覚円寺は福岡県最東端、人口約7000人の上毛町にある浄土真宗本願寺派の寺院です。およそ500年前に開かれました。橋を渡れば大分県中津市で、「豊前門徒」と呼ばれるほど信仰に厚い地域でもあります。現在は月忌参りや法事・葬儀のほか「近隣のカーラー店を集めた「カーラー寺」などのイベントも行っています。



浄土真宗本願寺派 覚円寺

## Q2 僧侶になろうと思ったきっかけは？

幼い頃、御門徒さんから「私の葬儀は坊ちゃんにお願いしているからね」と声をかけてもらうことがよくありました。高校ではサッカーで寮生活をして仏事か

ら離れて過ごし、服飾が好きだったのでアパレルの道に進むことも考えました。しかしその先に確信が持たず悩んでいたとき、改めて自分を育ててくれた御門徒さんの存在を思い出し、龍谷大学へ進学しお寺を継ぐことを決めました。

## Q3 僧侶になると決めたから、悩みはありましたか？

大学生の頃に「祖父の遺骨を撒きに行くぞ」と家族でインドに行ったことがあり、その時に上田紀行さんの「がんばれ仏教！」という本を旅のお供にしてみました。当時、僕はお寺を死者儀礼、葬送儀礼を営む場所くらいにしか思っていなかった。けれど「がんばれ仏教！」を読んでみると、多様なお坊さんがそれぞれの在り方で活動していて視野が広がったんです。それと同時に、自分はどうな僧侶になりたいのかという問いを突きつけられて。

自分の僧侶らしさを見つけるために、大学院に入りました。そして社会的な活動をしているお坊さん方にお話を聴いて回ったんです。だけど、自分の中でしっ



覚円寺 親鸞聖人像

## Q4 これまでどんな活動をしてきましたか？

自坊の地域での取り組みに加えて、自殺相談窓口の活動や、再エネの普及と寄付つきでんきを展開するソーシャルグッドな新電力会社「TERA Energy」の起業2025年には大阪万博で1日限りの「万博寺」を開催したり、様々な活動をしてきました。



子ども向け防災ワークショップ「地獄レスキュー! (ぼうさい修行ラリー) (TERA Energy 企画運営)

## Q6 どんな思いで活動されていますか？

大阪・應徳院の秋田光彦ご住職からかけていただいた「未来を語る僧侶になりなさい」という言葉は、今も折にふれて思い出され、私の背中を押してくれます。

何かの新しい第一歩を踏み出す時は、必ず反対されるし難しい。だけど、思いついたら、やらないと悔しいと感じる性格なんです。良いアイデアを思いついたら、その景色をみてみたい。これからやってみたいこともたくさんあります。

結局、僧侶としての答えは、まだ完全には見つかっていないのかもしれない。けれど問い続けることそのものが、いまの自分の僧侶らしさなんだと思っています。

「認定NPO法人京都自死・自殺相談センター(Sotto)」では理事を務めています。きっかけは学生時代の講義で自死に関する対人支援の研修会を紹介されたことでした。自坊に戻ったら自死された方のお通夜や葬儀を務めたり、相談を受けることもあるかもしれない。その時に「何ができる、何をしたいいけないか」を学んでおきたいと思いつきました。研修会では同年代の遺族の方からお話を伺う機会があった。その時「たまたま僕はいま元気で、家族にも恵まれている。しかし、いつ自分が死にたいという思いを抱えたり、大切な人を自死で失う立場になっても、決しておかしくはない」ということを感じたんです。それから、自分ができることはやらない。知ってしまったからには知らないふりはできないという思いで携わっています。



## Q5 万博寺について教えてください！

大阪・関西万博、すごい熱量でしたよね。僕も万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を、関わる人たちが本気で表現しようとしている姿に心が躍りました。でも、そこに宗教者が誰もいないことに気づいたんです。お坊さんならではの視点で、「いのち」について語ってみたいと思いました。いのちは必ず終わりを迎えますが、その時がいつ訪れるのかは、誰にも分かりません。だからこそ、いのちの輝きと儚さ、そして死をどのように受け止めていくのかを



見つめ直したい。そうしたい思いから、「無常」をテーマに据え、「生死脈々」というキャッチフレーズを掲げ、1日限りのポップアップなお寺「万博寺」を建立しました。徐々に協力の輪が広がり、最終的には200人以上のお坊さんが集まってくれました。様々

な宗派のお坊さんに出会ってもらう機会を作ることができ、「推しのお坊さんを見つけました!」というメッセージもいただきました。宗派を超えたいろんなお坊さんが一堂に会する場を万博で作れたことの意義は大きかったと思います。



「万博寺」。仏教音楽ライブや漫才説法ライブ、様々な宗派の僧侶による儀礼・法要などが営まれた。



## 協賛法人サポーター

●浄土宗 安楽寺(駒ヶ根市)、延命寺(堺市堺区)、慶蔵院(伊勢市)、西明寺(尼崎市)西林寺(大阪府泉南郡)、正覚寺(青森市)、清浄華院(京都市上京区)、正善寺(伊丹市)、称名寺(京都府久世郡)、勝楽寺(町田市)、新善光寺(札幌市中央区)、青岩寺(青森県上北郡)、檀王法林寺(京都市左京区)、潮音寺(東京都大島町)、念佛寺(八幡市)、梅窓院(港区)、寶松院(港区)、法善寺(大阪市中央区)、妙慶院(広島市中区)、龍岸寺(京都市下京区) ●浄土宗西山禅林寺派 宝泉寺(津島市) ●浄土真宗本願寺派 覺円寺(福岡県築上郡)、教専寺(赤穂市)、光照寺(大阪市東

淀川区)、西法寺(北九州市)、如来寺(池田市)、念誓寺(和歌山市)、養法寺(金沢市) ●真宗大谷派 正蓮寺(伊豆の国市)、護念寺(新潟市)、宝皇寺(函館市) ●浄土真宗興正派 晟徳寺(札幌市豊平区) ●天台宗 圓融寺(目黒区)、正明寺(姫路市)、●真言宗御室派 三津寺(大阪市中央区) ●真言宗須磨寺派 須磨寺(神戸市須磨区) ●臨済宗妙心寺派 圓光寺(台東区)、宜雲寺(江東区)、陽岳寺(江東区)、龍雲寺(世田谷区) ●曹洞宗 瑞生寺(浜松市中区)、南詢寺(守口市)、鳳仙寺(宮城県亘理郡)、築田寺(町田市) ●日蓮宗 池上實相寺(大田区) ●単立 五百

羅漢寺(目黒区)、瑞聖寺(港区)、法然院(京都市左京区) ●企業・団体・店舗 生田化研社(豊島区)、有限会社石の坂本(台東区)、大阪石材工業株式会社(富田林市)、薫寿堂(神戸市灘区)、神戸数珠店(京都市下京区)、作島(京都市下京区)、寺院コム(京都市左京区)、翠光堂阪急淡路駅前店(大阪市東淀川区)、大正大学(豊島区)、豊田愛山堂(京都市東山区)、一般社団法人日本石材産業協会(千代田区)、パン制作室シンクロ(芳賀郡)、福生(堺市西区)

敬称略・順不同

### 個人・法人サポーター募集

### 悩める誰かに、仏教の言葉を。ともに広める仲間になってくれませんか？

『フリースタイルな僧侶たち』は、皆さまからの寄付によって無料で配布しているフリーマガジンです。いただいたご支援が、次の一冊を作る大きな力となります。ともにフリスタを作り、広める仲間になっていただけましたら幸いです。

[年会費] 個人：5,000円 法人：30,000円

[特典] ●年2回最新号を最速でお届け ●主催イベントへ無料招待 ●毎号冊子にお名前を掲載(法人のみ) ●フリスタSNSでの宣伝協力(法人のみ)

### 配布スポット募集

### あなたの街にもフリスタを置きませんか？

近所のお寺やカフェ、書店など、フリスタを置いてほしい場所があれば、ぜひご推薦ください！(※編集部から直接ご連絡し、許可をいただいた場合に配布スポットとして登録いたします。)

詳細・お申込はこちらから  
お願いいたします。  
<https://freemonk.net/support>



### SNSでも情報発信しています！

イベントや展覧情報、本誌に載せきれなかった裏話などを発信しています。ぜひフォローお願いします！



X (Twitter)



Instagram



Facebook

## フリースタイルな僧侶たち

### 編集部あとがき



蘆月真成  
#写真

「らしさ」には守られる瞬間もあれば、迷わせられる瞬間もある。「らしさ」なんて結局、便宜上つけたものでしかない。「らしさ」も「仏教」も自己免疫疾患にならないように、帰りたい家があるぜくらいの関係で。



飯沼祥也  
#編集 #経理

10代~20代前半のころは「らしくなさ」に憧れていましたが、気付けば「らしさ」を追い求め、「らしくある」ことに拘りを持つようになっていた気がします。そんな自分を振り返ることができた機会でした。



川畑菜南子  
#編集 #経理  
#イベント

若かりし頃の私は数々のらしさに憧れ、かつ苦々しく思うこともあった。月日が流れ、年を取った私は「おばちゃんらしさ」を手に入れることで、ようやく肩の力の抜き方が分かるようになった……と思う。



菊川尚悟  
#編集 #SNS

勢いだけで生きていた頃が恋しい。憧れた人の人生を借りるように真似ては、足りないものを追いつけてきた。揺れながら、それでもまだ自分に期待している。いつかその先で、ふと自分らしさに出会えたら。



藏田史哉  
#編集 #SNS

「ジブンラシサ」を改めて考えた。が、結局、ヨクワカラナイ。自分を縛っているのか。輝かせているのか。「自分を最もたぶらかせるのは、自分の心だよ」という、ある先輩僧侶の言葉を思い出す。



鈴木一世  
#編集 #事務

「らしさ」とは「そうあるべき」という指針だと思っていた。でもその「らしさ」は自分で創造したものに過ぎず、ただの理想像だったのかも。従ってもいいし従わなくてもいい。ただ素直でいられたらいい、としておくか。



ツチダマホ  
#デザイン #SNS  
#イラスト

悩める「らしさ」は、時間をかけて自分に染み込ませながら、胸を張れる「らしさ」を、可愛がってあげたいです。



秦正顕  
#編集長

「人は、期待に応えたい生き物なんですよ。取材した雪山さん、丹羽先生、双方から共通して出てきた言葉です。誰かから押し付けられる「らしさ」に苦しむのは、じつは期待に応えたい気持ちがあるから。そう思うと、ふっと心が軽くなる気がしました。



福井裕孝  
#デザイン

慣れない法要や人前に立つ時など、自分に自信がないときほど、過度に「僧侶」らしい演技や振る舞いをしてしまっている気がする。僧侶は、「らしさ」を実践し体現する生き方でもあるけど、「らしさ」をまといながらも、自分の等身大のありようも見失わないようにしたいです。



水野綾巴  
#編集

「らしさ」に苦しむ人に、「自分らしさなんてない」「気にしなくていい」と言うことは簡単だけど、正論だけでは人は救われない。本誌で取り組んだ、「らしさ」を丁寧に解きほぐしていく営みが、誰かの息苦しさを少しでも軽くできたらと願っています。



村田保子  
#編集

「らしさ」はその時々で立ち上がる偶然的産物(なんなら私たちの存在も)。だから、恣意的で、着脱可能。そして裏表がある。「らしさ」を味方につけて、軽やかに生きていけたらいいなあ。



K.NORIMASA  
#写真 #SNS  
#事務

SUPER BEAVERの「らしさ」って曲に「僕は君じゃないし君も僕じゃないからすれ違う手を繋ぐそこには愛だって生まれる」という歌詞があります。自分だけに囚われるのではなく、関係性によって「らしさ」を超えられることもあると思います。



m.ito  
#編集 #グッズ

とらわれたり、反発したり、厄介な存在だけど、上手く使いこなして武器として昇華させたい。一生付きまとう「僧侶らしさ」も、いつか何も意識しなくなることが出来るだろうか。

フリースタイルな僧侶たち 第六十六号 特集 らしさ 二〇二六年三月十五日 発行

Illustration by Aona Hayashi